

大谷弘明 積層の家

2003年

中村好文 文・イラスト
YOSHIFUMI NAKAMURA



千変万化する光と影の劇的ともいえる表情の変化は、建築的であると同時に音楽的でもある



左—壁の入り際には、積層したガラスを差し込んだだけの通風用の開口がある
右—この写真、樹上で語り合う2人の少年のように見えませんか？



初めて「積層の家」を見学させてもらったのは、2005年の夏でした。

大学の夏の研修旅行の帰りに、一緒に教えている建築家の友人たち数人でドヤドヤと押しかけたので、たぶん、大谷さんは心中おだやかでなかったろうと思います。もちろん、そのことで大谷さんが迷惑そうな顔をしたというわけではありません。それどころか大谷さんは、終始、物静かな態度と、ソフトなハスキーヴォイスで、我々のどんな不躰な質問にも、丁寧に、そして生真面目に答えてくれました。かたわらに控えている奥さんは柔らかな微笑みを絶やさず、全員に冷たい飲み物をサービスしてくれましたし、礼儀正しく、大人しいお嬢さんは、好奇心をむきだしで右往左往し、ところかまわず写真を撮りまくる建築家集団のオタク的な振る舞いを、珍しい動物でも見るような目つきでそおと観察していました。

見学している間、私はこの住宅を運良く見学できたことをありがたく思いつつ、一方で、大勢で押しかけたことを後悔していました。この住宅の入念に設計されたスケール感や、洞窟の内部を思わせる独特の居心地を味わうには、大人数の訪問がふさわしくなかったことを、玄関を入ったとたんに悟ったからです。

ガラにもないことですが、私は借りてきた猫よろしく、首をすくめ、身を縮めるような気持ちで遠慮がちに見学させてもらいました。

ところが、こうした遠慮がちに見学にも発見はありました。そしてそれは、おもに玄関脇のクロゼット周辺の発見でした。たとえば、棚に並べてあった靴がどれもピカピカに磨いてあり、そのひとつひとつに木型が入っていたこと。整然と並べられている通勤用とおぼしき5つの革靴のうちの4つが、微妙な色違いはあるものの、すべてまったく同じデザイン、同じサイズであったこと。ハンガーパイプには見るからに上等の服地で仕立てられたスーツやジャケットが、それぞれ寸分のゆがみもなく、高級紳士服店のようにズラリと掛けられていたこと。そして、そのすべてのものが、例外なく流行に

左右されない、品格のあるオーソドックスなデザインであり、背後に熟練の職人技を感じさせる、いずれ名のあるにちがいないブランドの逸品ぞろいであったことです。

そのとき、もしそばにワトソン博士がいたら、私はこう言ったと思います。

「クロゼットの様子から分かるのは、この住宅の主人は痩せ型の建築家で、恐ろしく几帳面で、綺麗好き、しかもモノへのこだわりが人一倍強い、今どきまれに見る身だしなみの良い紳士だということだ。そして、おそらく最高級の職人仕事には、金に糸目をつけないタイプにちがいない。しかも、いったん手に入れた持ち物は、生涯、大切に大切に使い続けるはずだ。なによりも、ホンモノであること、正統的であること、普遍的であることに頑固にこだわる一徹者だろう。流行に左右されやすい軽佻浮薄な日本人には珍しいタイプだよ。分かるかね？ワトソン君」。

いつのまにかシャーロック・ホームズに変身していた私は、玄関脇のクロゼットに、はからずもこの住宅を見学するためのヒントを垣間見たような気持ちになって「うーむ」と大きくなすきました。これほど理想の高い、正統を愛する完璧主義、厳格主義の建築家なら、単なる「思いつき」や「ひらめき」で、自分にとって一番大きな持ち物になるはずの自邸を設計するはずはありません。というわけで、見学する側も「心してかからなくてはならないぞ」と、思わず身を引き締めたのでした。

それから1年数ヶ月経った秋の夕刻、今度こそ平常心で家全体をじっくり見学させてもらい、大谷さんから、あらためて設計にまつわる話や、住み手としての感想などを詳しく聞き出したいと思い、単身「積層の家」を再訪しました。

開口一番、大谷さんは静かな口調で「市街地の狭小地に家族が住まうための最大限の容積を確保すること。そして獲得した空間の中に、平穏で心豊かに過ごせる、自分の《居場所》と家族の《居場所》をつくりだすことが、この住宅のもっとも大切なテーマだった」。しかも、それを「すべてのディテールを拭き去った建築で実現したかった」と話してくれました。そして、その手段＝工法を模索した結果、板状のPC版を校倉造りのように積み重ねて壁を作るという独創的なアイデアに辿り着いたというのです。

照度を押さえた薄暗い室内には、モーツァルトのピアノソナタが静かに流れていました。私にはその音楽がまるで積層の間からしみ出しているように感じられました。大のクラシック音楽好きで、東京芸大の学生だったころは、音楽学部の授業に潜り込んで室内楽の作曲法の講義を聴講したこともあるという大谷さんは、クラシック音楽の構成は示唆に富んでいて、自分の建築の思考の中を広げたり、深めたりするのに最も役立っていると思う、と語っていました。

正直に白状しますと、この住宅を雑誌で初めて見たとき、私はうかつにも「新奇性と話題性を狙った若い建築家の野心作」だと思いました。しかし、実際に建物を訪れて見学させてもらい、大谷さん自身からこの建築にまつわる設計思考の経緯と工事経過、また、住みはじめからの発見や住み心地の感想を聞くうちに、こうした私の見方が、まったく的はずれだったことに気づきました。「建築を見る眼がない」と言われれば、ま

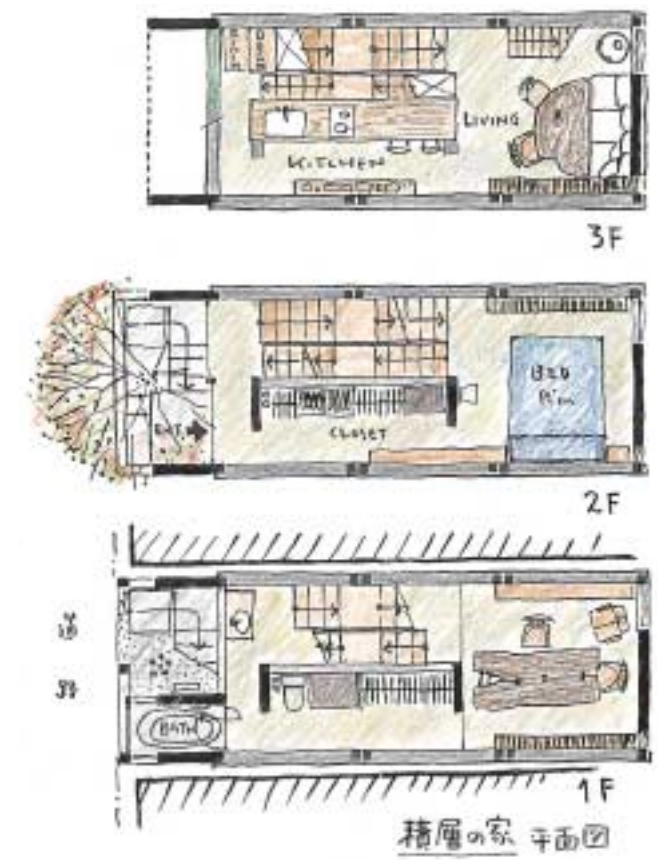


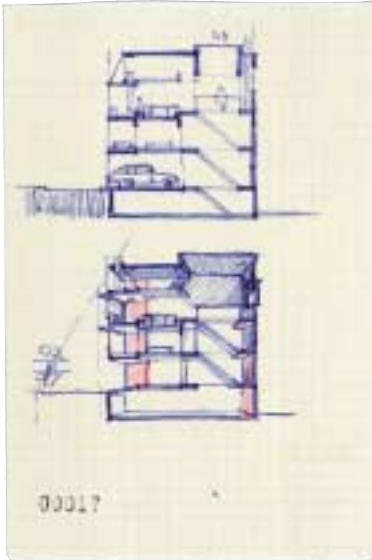
ダブルエックス階段の「かなめ」となる踊り場。この階段は作者が「すべてのディテールを拭き去った」と言い切った究極のデザイン

さにその通りです。このような私の浅見浅慮を見抜いたのでしようか、大谷さんはさらに追い打ちをかけてきて、実にスマートなやり方で私にトドメの一撃を加えました。

トドメはスクラップ・ブックでした。

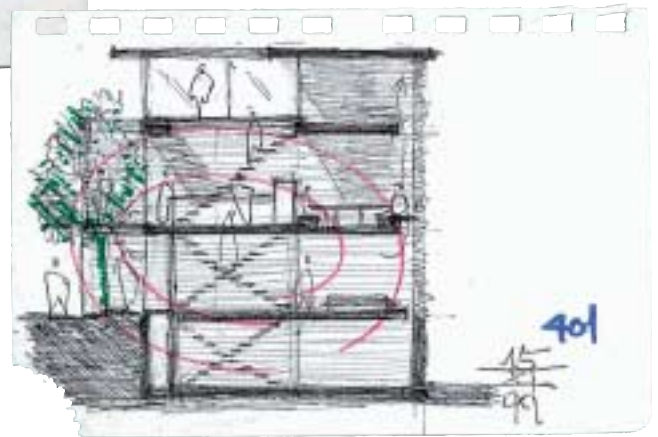
「人にはあまりお見せしないんですが、今日は特別に…」と断って、本棚から取り出して見せてくれたのは、3冊の分厚いスクラップ・ブックでした。中にはこの住宅の設計過程で大谷さんが描いた大小様々なエスキースやメモ書きが、キッチンと整理され日付順に整然と貼られていました。このエスキースの量の多さ、質の高さ、緻密さ、思考の深さ、粘り強さ、そのこと





これ見よがしなところはまるでなく、うっかりすると通り過ぎてしまうほど清楚で控えめなたずまい

左—土地取得か否かのスタディ (1997.3.2)
中—積層案断面図 (1998.12.31)
下—ダブルエクス階段の登場 (1999.11.15)
(3点とも大谷氏のスケッチ)



ごとくに、私は打ちのめされたのです。自邸とはいえ、延床面積24坪に満たない小住宅に込められた、大谷弘明という建築家のあくなき執念の痕跡を目のあたりにして、思わず居すまいを正さずにいられませんでした。

エスキースに残された日付から読み取ると、この住宅の計画は1996年に始まり、最終的に建物が完成する2003年まで、延々7年間にわたっています。小さな手帳の頁に図面が細かく描き込んであるのは、おもに通勤の電車の中でエスキースをしていたからだそうです。少し大きい紙に描いて彩色したエスキースもあり、私が「これは？」という目顔で大谷さんを窺うと、即座に「ああ、それは大晦日に除夜の鐘の音を聞きながら描いたんですよ」という応えが返ってきました。

板状に成形したPC版を積層するというアイデアも、単に、

思いつきや、ひらめきではなかったことが、エスキースの日付を丹念に追っていくと分かります。スケッチ開始は96年ですが、コンクリート・ブロック造でスタートしたエスキースが、ある時点でPC版の積層案に変わり、97年11月15日にはこの住宅のプランの最大の決め手となった「ダブルエクス階段」が忽然と現れます。「おおー、来た、来た！」。頁をめくっていた私は、このエスキースの出現に胸が躍りました。そして、それから次から次へとプランの変遷が続きます。大谷さんは思考を積み重ねては崩し、積み重ねては崩すタイプです。そして、その繰り返しの中から新たな発想が湧き、それをまた着実に、綿密に積み重ねていく…、つまり思考を積層させていく建築家なのです。

夜が更けていくのも忘れ、私は、変貌し、深化し、次第に具体化していくエスキースを、一枚、一枚、めくり続けました。建築好きの私にとって、それは、バッハのゴールドベルグ変奏曲に聴き入っている時のような、充実した至福の時間でした。*



寝室から階段室越しの眺め。この住宅特有の洞窟的な居心地の良さが感じられるはず

なかむら・よしふみ—建築家/1948年生まれ。武蔵野美術大学建築学科卒業。1972~74年、宍道設計事務所。1975年、都立品川職業訓練校木工科にて家具職人の訓練を受ける。1976~80年、吉村順三設計事務所。1981年、レミングハウス設立。
三谷さんの家 (1986)、REI HUT (2001) などの住宅作品の他に、『住宅巡礼』(新潮社 2000)、『意中の建築上・下』(新潮社 2005) などの著作がある。